第 137 回　埼玉県三芳町の飯田像と石原像

筆者：林　久治（記載：2020 年 10 月 17 日）

（１）前書き

私（筆者の林）は Random Walks （乱歩）という題名で偏屈老人（林久治）の気侭な紀行文のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団（１）のサイト/）の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」と言う意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいるので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

私は武漢肺炎の緊急事態宣言が出され外出を自粛していたが、緊急事態宣言が解除されたので、銅像探索を再開している。しかし、大阪に行くことはまだ自粛しているので、東京で銅像探索を行いその探索記を書いてきた（123 回の記事/f、124 回の記事/f、125 回の記事/f、126 回の記事/f、127 回の記事/f、128 回の記事/f、129 回の記事/f、130 回の記事/f、131 回の記事/f、132 回の記事/f、133 回の記事/f、134 回の記事/f、及び135 回の記事/f）。

私は 10 月 3 日に浦和駅前と草加駅前に行っておせんさん像などを探索し、その探索記を前回の記事/f で書いた。10 月 13 日には、同じ埼玉県シリーズで、東上線沿線の鶴瀬駅と上福岡駅の近郊で銅像探索を行った。今回の銅像は駅から少し遠い所にあるので、探索を後回しにしていたが、思い切って決行した次第である。本稿は鶴瀬駅での探索記である。上福岡駅での探索記は次回記載する。なお、本稿においては、資料の記述を緑文字で、私（林）の意見や説明を青文字で記載する。

（２）今回探索した東上線沿線の地図

東上線沿線は、私の自宅のある練馬区大泉学園町からは近いのであるが、駅から近い銅像は１）のサイト/に殆ど収録されてしまっている。未収録の銅像は、駅から遠い所に設置されている。その中で、今回は鶴瀬駅と上福岡駅の近郊で銅像探索を行った。両駅の周辺地図を、次ページの図１上に示す。東上線沿線にある朝霞市、志木市、富士見市、ふじみ野市は、和光市と川越市の間にあるベッドタウンである。三芳町は東上線からかなり離れているので、現在でもあまり便利な所ではない。

本稿では、三芳町にある２体の銅像を紹介しよう。図１下には、今回探索した「三芳町自然の森レクリエーション公園」の周辺地図を示す。本公園には飯田信助像があり（図１下の②）、「ぎんざスエヒロ鶴瀬店」には石原仁太郎像がある（図１下の③）。この地域は、東上線の駅から遠く、一番行きやすいのは川越街道を利用して車で行くことである。しかし、私は老齢のため運転免許証を返納してしまったので、自家用車を利用できない。そこで、鶴瀬駅からのバス便を調査した。

図１．上：今回探索した東上線沿線の地図。本図は、２）のサイト/より借用。
下：三芳町自然の森レクリェーション公園の周辺地図（図１上の①の四角内の地域）。本図は、３）のサイト/6より借用。

鶴瀬駅からのバス便を調査した結果、ウィキペディアに次のような記載を発見した。

東武東上線沿線において既存のバス事業者であった東武バス（現東武バスウエスト）や西武バス、あるいは国際興業バスなどが、三芳町など東入間地域で積極的にバス路線を展開しなかった。そのため、当地において地域住民の足として乗合バス事業を行うために創業された会社が「ライフバス」ある。設立は 1977 年 4 月 21 日。

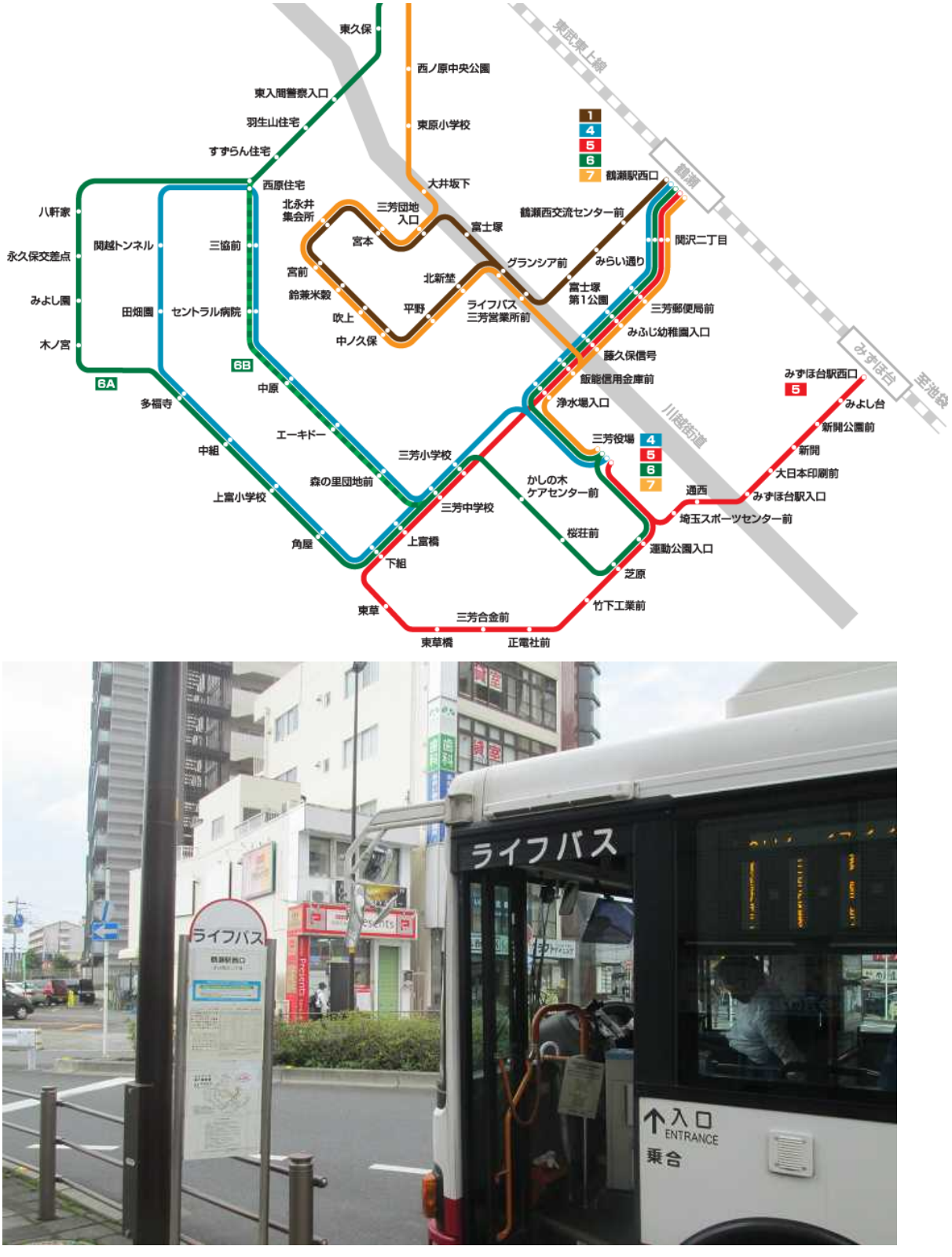

図２．上：ライフバスの路線図、下：ライフバスの「鶴瀬駅西口」バス停。

ライフバスの路線図を図２上に示す。各路線の運行は１時間に１本程度である。しかし、鶴瀬駅西口から三芳役場までは４本の路線があるので、「この間の利用であればそんなに不便ではなかろう」と判断して、今回の探索では本バスを利用することとした。

（３）三芳町自然の森・レクリェーション公園の飯田信助像

本像は三芳町役場の近くにあるので（図１下の②地点）、10 月 13 日の探索では、鶴瀬駅西口からライフバスを利用して役場に行く計画であった。いざ駅に降りてみると、バス停の場所がさっぱり分からない。仕方なく、交番で聞こうと思って歩いていると、三芳町役場行きのバスが駅前広場を走っているのを発見した。そのバスの後を追うと、幸いなことにバスは西口バス停で止まっていた（図２下の写真を参照）。「５分後に発車」とのことで、誠にラッキーではあったが、私の好判断の賜物であった。昼間のためにバスには乗客が 2-3 人しかいなかったが、交通渋滞もなく、短時間で三芳町役場に到着した。役場は巨大なビルであった（図３上）。

図３．上：三芳町役場、下：緑のトラスト保全第 14 号地「藤久保の平地林」。

役所の傍には、緑のトラスト保全第 14 号地「藤久保の平地林」が保存されていた。その写真を図３下に示す。その説明板には、次のように書かれていた。

緑のトラスト保全第 14 号地「藤久保の平地林」

三芳町では、ふるさと埼玉の優れた自然や貴重な歴史的環境を後世に残すため、町民・企業の皆さまからの寄附金を資金としてさいたま緑のトラスト運動を展開しています。

このたび、三芳町藤久保地内に残された貴重な樹林地を「緑のトラスト保全第 14 号地『藤久保の平地林』」として埼玉県とともに取得し、保全を図ることとしました。

この樹林地は、武蔵野台地の東部に位置する面積約 3.0 ヘクタールの樹林地で、コナラやクヌギを主体とした落葉広葉樹林が広がり、多様な動植物が見られます。

この一帯は、江戸時代初期に川越藩主松平信綱によって川越街道が整備された際に開発され、屋敷地、耕作地とともに平地林も作られました。

平地林にはコナラ、クヌギ、アカマツなどを植え、燃料用の薪として利用したほか、落葉は堆肥の原料として活用され、この樹林地では現在まで落葉堆肥を使った循環農法が行われてきました。

この歴史ある豊かな自然環境をぜひ皆さまで守っていきましょう。

平成三十年　三芳町。埼玉県

私はこの平地林を見て「三芳町は未だ武蔵野の面影が残っているので、この林は自然林の生き残りだろう」と思ったが、上記の説明文により「これは自然林ではなく、信綱公によって人工的に整備された」ことが分かった。「藤久保の平地林」の先に、「三芳町自然の森・レクリェーション公園」があった。その入口の案内板を図４に示す。両者は混同しやすいので注意しませう。図４の背後に写っているのは、藤久保の平地林である。（本文は、７ページに続く。）

図４．「三芳町自然の森・レクリェーション公園」の入口

図５．上：公園の入口、下左：飯田信助翁之像、下右：胸像背面の銘文。

「藤久保の平地林」を通り抜けると「三芳町自然の森・レクリェーション公園」の広いグラウンドに到着した。その入口（図１下の①地点）に１体の胸像があった。その写真を図５に示す。胸像の台座正面には「飯田信助翁之像」とのプレートが貼付されていた。胸像背面には「幾久作」との銘文が刻まれていた。作者名には一抹の不安があるが、「幾久」が正しければ、作家は「小金丸幾久」である。台座背面には碑文が貼付されており、その写真を図６に示す。

図６．台座背面の碑文

本碑文は解読可能で、次のように書かれていた。

父飯田信助は明治二十一年福井県大野市本町矢田与三郎の次男として生まれ、母方の伯父上庄西山印牧助ヱ門の実子となるも同二十三年乾側上丁飯田吉蔵の養子となる。大正八年兄を頼って上京、本郷神明町に青物店を開業。大正十二年田端に移り飯田百貨店を創立。以来、田端銀座商盛会を結成。王子上十条に百貨店支店を設け昭和十五年区会議員に当選し七年間区政に参画。業界に於いては駒込市場を中心とする青果業者の連合会長となり豊島分場に入場。昭和十九年戦災にあい止むなく店を解散。戦後二十年北区滝野川に飯田百貨店を再建。困難刻苦の結果、板橋区宮本町及び同区幸町更に練馬区貫井町に支店を設け、その間昭和二十五年には北区議会議員として一期を区政に盡す。

昭和三十七年この地に飯田百貨店総合グラウンド三芳園を創設する。

昭和三十八年九月　飯田信太郎　飯田高次　飯田静子　之建

なお、明治 21 年は 1888 年、大正 8 年は 1919 年、昭和 15 年は 1940 年、昭和 37 年は 1962 年である。

５）のサイト/1には、株式会社コモディイイダ（前身は飯田百貨店）の沿革が次のように書かれている。

1919 年：飯田信助は文京区神明町に間口２間の青果店を創業。

1972 年：飯田百貨店陸上部が発足（→男女駅伝大会などで活躍）。

2019 年：店舗数は 84、社員数は 6,171 人。

上記のように、飯田信助氏は個人企業から、6,171 人の社員数を擁する大スーパーチェインに一代で発展させたことは、素晴らしい業績である。以上の資料などにより、飯田像の概要は次のようになる。

飯田信助翁之像

場所：埼玉県入間郡三芳町大字藤久保 1110　三芳町自然の森レクリエーション公園

建立時期：1963 年 9 月

建立者：翁の子供（飯田信太郎、飯田高次、飯田静子）

制作者：小金丸幾久？

設置経緯（碑文要約）：飯田信助は明治 21（1888）年福井県大野市本町矢田与三郎の次男として生まれ、飯田吉蔵の養子となる。大正 8（1919）年兄を頼って上京、本郷神明町に青物店を開業。大正 12（1923）年田端に移り飯田百貨店を創立。以来、田端銀座商盛会を結成。王子上十条に百貨店支店を設け昭和 15（1940）年区会議員に当選し七年間区政に参画。業界に於いては駒込市場を中心とする青果業者の連合会長となり豊島分場に入場。昭和 19（1944）年戦災にあい止むなく店を解散。戦後 20（1945）年北区滝野川に飯田百貨店を再建。困難刻苦の結果、板橋区宮本町及び同区幸町更に練馬区貫井町に支店を設け、その間昭和 25（1950）年には北区議会議員として一期を区政に盡す。昭和 37（1962）年この地に飯田百貨店総合グラウンド三芳園を創設する。

なお、ウィキペディアによれば、小金丸幾久の略歴は次の通りである。

小金丸 幾久（1915 － 2003）は、長崎県壱岐郡武生水村（現・壱岐市）出身の彫刻家、太平洋美術学校教授、東京大学建築学科講師。代表作は明治百年記念「明治天皇像」（東京･桜ヶ丘公園）など。

（３）ぎんざスエヒロ鶴瀬店の石原仁太郎像

上記の飯田像から数分歩くと川越街道に出る。その沿道（図１下の③地点）に「ぎんざスエヒロ鶴瀬店」がある。その写真を図７上に示す。何故こんな辺鄙な所に銀座スエヒロがあるのでしょうか？その答えは、６）のサイト/1に次のように書かれている。

かつてステーキの名店だった「銀座スエヒロ」。その直営だった店が三芳町の川越街道沿いに残り、味を守り続ける。小泉市朗社長は、往年の銀座店の復活を期す。

社長は語る：志木の生まれで志木の育ちです（志木は三芳のすぐ近く）。大学は地元で立教だったんですけども、大学三年の時サラリーマンには向いてないなと思って調理師学校に行ったんですね。四年になって、天皇陛下の料理番をやった斎藤文次郎さんって方の紹介で、スエヒロに入ったんです。当時は大卒は少なかったんですけど。スエヒロに入ったときに、たまたま同じ職場に女性がいたわけです。社長の娘を誘ったとかで、ずいぶん長いことごたごたあったんですよ。先代、石原仁太郎氏は銀座スエヒロの創業者です。もともと大阪にそういう店ができて、そこで丁稚で入った人間が東京に出てきた。入社当時の、「銀座スエヒロ」っていうのは超有名店ですよね。 銀座の松坂屋の裏に、七階建の

ビル。地下から全部スエヒロだったんです。あと、築地に九階建のビル。それも地下から九階まで全部スエヒロ。ビルを全部一つの店舗が使うところは、ほとんどないと思います。

その「銀座スエヒロ」が倒産して、現在は小泉社長が「鶴瀬店」を経営しているようだ。そういう事情で、先代社長の銅像も当店に引っ越して来たらしい。

図７．上：ぎんざスエヒロ鶴瀬店、下：昼のステーキランチ（1040 円）

私が当店に着いたのは 12 時過ぎであった（そのように、計算していたのだ）。丁度、会社員風の男性が数人、歩いて当店に入ろうとしていた。当店の駐車場には、多くの車が駐車していた。当店の玄関には、件の銅像が立っておられた。私は銅像を後廻しにして、昼食を注文した。店内は瀟洒な雰囲気で、流石に先代社長の嗜好が感じられた。食堂は可成り広く、そこに多数の客を分散して収容していた。会社員風の客もいたが、この辺には会社は少ない。大多数の客は身成が良かった。多分、「銀座スエヒロ」の味を求めて、遠方から車で来たのであろう。

私も「せっかくスエヒロに来たのだから」と、ランチで一番高価な「A ランチ」（ステーキランチ 130ｇ、汁物・サラダ・ライス付き、税込み 1040 円）を注文した。その写真を図７下に示す。肉は柔らかく大変美味であった。ここのランチの牛肉はオーストラリア産を使っているようだ。しかし、オーストラリア肉に特有な「臭味」は全く感じられなかった。これも、スエヒロの技術であろう。私は米国産や支那産の食品は安全上お断りであるが、オーストラリア産は味が良ければ歓迎である。

私は昼食後に会計のお姉さんに「銅像の写真を撮ってもよいか？」と尋ねた。彼女は肯定的な顔をしたが、丁度、そばに居た社長に伺いを立てた。社長は「どうぞ」との返事で、銅像周辺に置いてあった物を整理して呉れた。その写真を図８に示す。

図８．石原仁太郎像

本像には、銘文も碑文もなかったが、６）のサイト/1で小泉社長が「これは先代の石原社長だ」と言っているので間違いなかろう。本サイトでは、「先代は、どんな人だったんですか」との質問に対して、小泉社長は次のように答えている。

①（私は）先代が自分で見つけた相手（婿）じゃないから、ずいぶん厳しく接しられたんですけども。ある日わだかまりが突然溶けてから、もうすべて、どこ行くんでも一緒に連れてってもらったり、スエヒロの仕事を一緒にやってきたんですよね。

②当時は自分も、ただひたすら一緒にいたんでわからなかったですが、今から考えると、そうですね～、とんでもない、日本を代表するような、人だと思いますね。ええ。容姿もそうですけども、あらゆる面で。この銅像(鶴瀬店に設置)がそうですけども、とにかく大きい。若いとき百キロ以上って言ってましたから。アメリカ産の牛肉を、日本で最初に取り入れて、「アメリカ産」という表示をして売り出したのも先代なんですよね。アメリカ大使館からも表彰されたりしてました。

③この店は今年（2007 年）で 30 年なんです。その当時、私は銀座のお店の責任者、あと全体の調理長もやってたんですが、「ちょっと行こう」っていうんで、見に来たところが、川越街道沿いに、店なんかどこもないんですよね。「やめた方がいいんじゃないですか」って言ったけれども、「地元の方（小泉社長の出生地）に自分の店を持ってなさい。自分だけの店っていうのが必要になってくるから」ってことを言われて、やる事に決まったんですよね。先代が店を見て、全部自分で図面を描いて、あとはもう、お店の大工さんに言って。全部が先代のお手製というか。

④銀座では、階によって、いくらか高級な階もあったんですけども、一階とか地下とかは、一般の方に召し上がっていただくようなあれだったんです。それと同じに。ここだけは今でも、ほとんど同じメニューなんですよね。

⑤先代が、昭和 60 年に亡くなった。そのあと、銀座のスエヒロは、私の家内の兄が後を継いだんですけども、全部ビルを壊して、新しいビルをつくったりとか。色々やったもんですから。今、銀座スエヒロは建物を売っちゃって、その中のほんの地下だけ、ちょっと小さいスペースでやってますけども。それでうちは、銅像と、こういうの（機械など）を、引き取った。

図９．左：６）のサイト/1の石原像、右：６）のサイト/1の小泉現社長。

７）のサイト/Dは、「スエヒロ」について、次のように書いている。

①スエヒロとは大阪市で開業した「ビフテキのスエヒロ」（スエヒロ朝日）をルーツとした各企業が営んでいるステーキなどの肉料理を主とした老舗の高級料理店（一部企業を除く）、ファミリーレストラン、学生食堂及び、その屋号である。現在は、スエヒロを営んでいる者たちを統括している「スエヒロ会」が存在する。

②創業者・上島歳末は、1910 年 3 月 10 日、大阪市北区堂島上二丁目に、「弘得社」（こうとくしゃ）の名で洋食屋を開業した。 その後、1920 年 3 月 10 日に、同じ地・堂島に「ビステキ専門スエヒロ」を開業する。運営会社は「株式会社スエヒロ朝日」この開業が全国に広がるスエヒロの始まりである。 スエヒロ会では弘得社の創業日、ビステキ専門スエヒロ開業をスエヒロの起源としている。2010 年 3 月 10 日に、創業 100 周年を迎えた。

③スエヒロは、「スエヒロ朝日」から暖簾分けで全国に展開されている。そのため、運営会社によって店の雰囲気やシステム、価格などが全く違う。しかし、創業者の意思を引継ぐためスエヒロ会を発足させたり、タレなどスエヒロの伝統を各社が保っている。

上記の文章より分かるように、「スエヒロ」の創業者は上島歳末氏である。石原仁太郎氏は、大阪のスエヒロ本店（弘得社）に入社して、上島氏の下で修行し、暖簾分けで「銀座スエヒロ」を開業したようだ。そこら辺の事情を、８）のサイト/1は次のように書いている。

石原仁太郎（いしはら　にたろう、1905.10.18-1985.5.23）

福井県三方出身。14 歳で大阪へ出て甘栗売り、砂糖販売、トラックの運転手などをした後、1925(T14)年大阪・曽根崎新地の洋食店「弘得社」に入社。10 年間の下働きで技術を磨き、1933(S8) 年のれん分けの形で東京・銀座 6 丁目にビフテキステーキ「銀座スエヒロ」を開業した。肉料理の大衆化のため次々と‘新作’を発表して、ＯＬやサラリーマンの食欲を満たす。

1966 年上嶋孝ら東京スエヒロ 4 社でスエヒロ相互株式会社設立。スエヒロ食品社長などを務めた。富士山麓にスエヒロ牧場を作り、ステーキに適した和牛品種を作ろうと考察したりとステーキ一代の人生で、1983 年黄綬褒章を受章。著書に『ビフテキの王様―信念の商法』がある。一方、無償の保育園事業を行ったり、故郷、福井県三方五湖に浮かぶ古民家を移築した一軒宿の旅館「虹岳島荘」(こがしまそう)を開設した。享年 79 歳。

以上の資料などにより、石原像の概要は次の通りである。

石原仁太郎像

場所：埼玉県入間郡三芳町藤久保 583-1　ぎんざスエヒロ鶴瀬店玄関

建立時期：不明、制作者：不明。

設置経緯：石原仁太郎（いしはら・にたろう、1905-1985）氏は福井県三方出身。14 歳で大阪へ出て甘栗売り、砂糖販売、トラックの運転手などをした後、1925(T14)年大阪・曽根崎新地の洋食店「弘得社」に入社。10 年間の下働きで技術を磨き、1933(S8)年のれん分けの形で東京・銀座 6 丁目にビフテキステーキ「銀座スエヒロ」を開業した。肉料理の大衆化のため次々と‘新作’を発表して、ＯＬやサラリーマンの食欲を満たす。1966 年上嶋孝ら東京スエヒロ 4 社でスエヒロ相互株式会社設立。スエヒロ食品社長などを務めた。富士山麓にスエヒロ牧場を作り、ステーキに適した和牛品種を作ろうと考察したりとステーキ一代の人生で、1983 年黄綬褒章を受章。著書に「ビフテキの王様―信念の商法」がある。一方、無償の保育園事業を行ったり、故郷、福井県三方五湖に浮かぶ古民家を移築した一軒宿の旅館「虹岳島荘」(こがしまそう)を開設した。

参考資料

１）のサイト：https://douzou.guidebook.jp/

２）のサイト：http://map2.nissan.co.jp/c/f/DEALER/STATION/ST22077/11235/

３）のサイト：
http://as.chizumaru.com/famima/detailMap?account=famima&bid=21866

４）のサイト：http://www.lifebus.jp/line_west.html

５）のサイト：https://www.comodi-iida.co.jp/corp/profile.html

６）のサイト：http://tojoshinbun.com/suehiro.html

７）のサイト：
https://www.wikiwand.com/ja/%E3%82%B9%E3%82%A8%E3%83%92%E3%83%AD

８）のサイト：
http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/A/ishihara_ni.html